

Joseph Aoun and Yen-hui Audrey Li:  
*Essays on the Representational and Derivational Nature  
 of Grammar: the Diversity of Wh-constructions*

Cambridge: MIT Press, 2003. xii+289 pp.

---

田中宏明

---

## 1. はじめに

本書は、その名の示す通り wh 構文の多様性を論じたものであるが、その背景にあるのは、現在言語学者の間で激しい議論的になっている「派生に基づく文法原理」であるべきか、「表示に基づく文法原理」であるべきか、という問題である。本書では、wh 構文の中でも特に優位性効果と関係詞節に焦点をあててこの問題を精査・検討し、全体としては派生・表示の両方とも必要であると主張する内容になっている。

本書は、基本的には独立した2つのパートから成り立つ「2部構成」の体裁をとっている。Part I (第1~3章) は wh 疑問文の優位性効果と解釈に関する論考 (*Wh-Interrogatives: Superiority and Interpretation*), Part II (第4~7章) は関係詞節の派生と構造に関する論考 (*Relativization: Derivation and Structure*) となっており、全体を貫く大きな柱が「再構築 (reconstruction)」の概念である。つまり、再構築が起り得るのであれば、移動があるのだという証拠になり、逆に再構築が起り得ないのであれば移動はないという証拠になる (cf. Chomsky 1995: 71-74)。以下、この2つのパートの内容をそれぞれ概観して考察を加える。

## 2. Part I (第1~3章: wh 疑問文の優位性効果と解釈) の概要

第1章では、優位性効果と移動に関する問題を扱う。次に第2章では、優位性効果と最小合致条件 (Minimal Match Condition) を論じ、さらに第3章では、優位性効果と解釈を議論する。

まず第1章の優位性効果と移動との関連性について述べる。優位性条件は、もともと Kuno and Robinson 1972 において移動に対する制約として提唱されたもので、その趣旨は以下の3点に要約される。

- (1) a. 優位性効果は wh 語に適用する
- b. 優位性効果は移動の特質である
- c. 優位性効果は他の wh 要素を横断する場合生じる

本章ではこの3つの論点すべてに反駁する形で、議論が展開される。優位性効果が移動や横断 (crossing) に起因しない例として、レバノン・アラビア語 (Lebanese Arabic, 以下 LA) の非文(2), (3)を挙げている。これらの例においては、*wh*-in-situ (*wh*<sub>2</sub>) が「who 要素」ではなく「which 要素」である場合にその文法性が大幅に向上することから、その非文法性は優位性条件違反に帰せられるべきものである。

- (2) \*<sub>CP</sub> *wh*<sub>1</sub> ... [<sub>IP</sub> ... [<sub>island</sub> ... resumptive pronoun<sub>1</sub> ...] ... *wh*<sub>2</sub> ...]]
- (3) \*<sub>CP</sub> *wh*<sub>1</sub> ... [<sub>IP</sub> ... [<sub>island</sub> ... *wh*<sub>2</sub> ...] ... *x*<sub>1</sub> ...]]

(2)では再述代名詞と *wh*<sub>2</sub> (in-situ) がお互いを C 統御せず、(3)では *wh*<sub>2</sub> (in-situ) と *x*<sub>1</sub> (*wh*<sub>1</sub> の痕跡) がお互いを C 統御しない。それにもかかわらずこの2例は LA では優位性条件の違反となり、非文となる。従ってこの現象は、Kuno and Robinson に対する反例となり、移動や横断の観点では説明できないことになる。

次に第2章では、この問題を解決するため最小合致条件 (Minimal Match Condition) が提唱される。

- (4) Minimal Match Condition (MMC)

A *wh*-operator must form a chain with the closest XP with a [+*wh*] feature that it c-commands.

MMC は表示にかかる条件で、ここでいう連鎖 (chain) とは通例假定されているものとは異なり、演算子と変項とを合致 (Match) させるものである。これと全単射原理 (the Bijection Principle) とを組み合わせれば上記の(2), (3)を非文として適切に排除できる。つまり(2)では、再述代名詞と  $wb_2$  は演算子から階層上等距離にあるため、MMC による連鎖の形成が両者とも可能となってしまう。その結果全単射原理により非文となる。(3)でも同様で、MMC と全単射原理とにより、非文となる。

さらに第3章では、弱交差に基づく優位性効果研究 (cf. Watanabe 1995, Hornstein 1995) を批判しながら、多重疑問文の解釈を議論する。その結果、多重疑問文の解釈としては以下の3つの分類を設定する。

- (5) a. 関数的解釈 (functional interpretation) (wh 疑問詞が他の数量化表現 (quantificational phrase [QP]) と相互作用する場合)：領域条件も介在効果も受けない。
- b. 分配的解釈 (distributive interpretation) (wh 疑問詞が他の数量化表現と相互作用する場合)：領域条件は受けないが、介在効果を受ける。
- c. ペアリスト解釈 (pair-list interpretation) (wh 疑問詞が他の wh 疑問詞と相互作用する場合)：領域条件も介在効果も受ける。

例えば、Which woman did every man invite? という QP/wh 疑問文に対し関数的解釈を適用すると「His mother.」が可能な答えとなるが、これに分配的解釈を適用すると、「John invited Mary, Bill invited Sue...」が可能な答えとなる。なおペアリスト解釈とは、分配的解釈と同内容であるが、本書では LA データの考察に基づきこの両者を敢えて区別する。その理由は、wh/wh 疑問文には Tense による領域条件が課されるのに対し (5 c), QP/wh 疑問文には領域条件が課されないからである (5 b)。

### 3. Part II (第4~7章：関係詞節の派生と構造) の概要

第4章では主名詞先行型関係詞節構文 (Head-Initial Relative Construction [HIRL]) を扱い、第5章では主名詞後行型関係詞節構文 (Head-Final Relative

Construction [HFRL]) を扱い、第 6 章では付加構造と派生を論じ、第 7 章では関係詞節化を類型・分類する。

Part II においても Part I と同様、再構築を移動の診断 (diagnostic) として使用する点で終始一貫しており、ここでは主名詞 (Head) に移動があるか否かを分析するのに極めて有効である。

まず第 4 章では、英語や LA を題材にして主名詞先行型関係詞節を扱う。そもそも英語の関係詞節の分析に関しては、70 年代から 90 年代初頭まで NP 付加構造 ( $[_{NP} NP CP]$  という右方向付加) 分析が主流 (cf. Chomsky 1977) となっていて、その結果関係詞節内の wh 演算子の移動という点に議論が集中して、主名詞 (Head) と関係詞節との関係がどうも明確にされて来ないきらいがあった。Kayne 1994 はこういった状況に疑問を呈し、Brame, Schachter, Vergnaud らの 70 年代の繰り上げ (raising/promotion) 分析を復活させる形で、関係詞節の構造を  $[_{DP} D CP]$  とするとともに、主名詞の CP 指定辞位置への繰り上げ移動を提唱した。

本章ではこれらの先行研究を発展・統合させる形で、以下の表に示す 2 種類の関係詞節を提唱する。主名詞が基底生成される関係詞節に対しても付加構造を認めず、両者とも  $[_{DP} D CP]$  という補部構造 (complementation structure) に統一した点が極めて重要である。

#### (6) 英語の 2 種類の関係詞節

	特 徴	派 生	構 造
タイプ I 限定詞を伴う非 wh 関係詞節	主名詞の再構築可能	主名詞が繰り上げ移動する	補部構造
wh 関係詞節及びタイプ II 限定詞を伴う非 wh 関係詞節	主名詞の再構築不可能	主名詞は基底生成される演算子が移動する	補部構造

なお、タイプ I 限定詞 (type I determiner) とは、the forty men, every ten minutes, all fifty Vikings 等における the, every, all のように数表現 (number expression) と共起可能なものであり、タイプ II 限定詞とは、そうでないものを指す (cf. Carlson 1977: 525)。

第 5~6 章では、中国語や日本語を題材として主名詞後行型関係詞節を扱う。

中国語では再構築されるものは DP ではなく NP であるとされ、さらに関係詞節全体が NP であることから、関係詞節の派生構造は  $[_{NP} CP NP]$  という左方向付加構造が提唱される。これは結果的に、右方向付加を厳格に排除する反対称性統語論 (antisymmetric syntax) を支持することにもなる (cf. Kayne 1994: 15ff.)。

第7章では、諸言語の関係詞節化を類型・分類することにより Part II 全体の総括をする。ここでの議論を以下のような表にまとめてみる。

(7)

	英語(HIRL)	LA(HIRL)	中国語(HFRL)	日本語(HFRL)
NP 移動	×	×	○	×
DP 移動	○	○	×	×
演算子移動	○	(○)	○	×
主名詞の基底生成	○	○	○	○
構造	補部構造	補部構造	左方向付加構造	左方向付加構造

この結果、主名詞の再構築に関し、関係詞節は以下の3通りの分類が可能である。

- (8) a. 主名詞は、束縛と作用域に関し完全に再構築可能である。(英語や LA の DP 移動の場合)
- b. 主名詞は束縛に関し再構築可能だが、作用域に関しては再構築不可能である。(中国語の NP 移動の場合)
- c. 主名詞は完全に再構築不可能である。(英語や中国語の演算子移動の場合、及び日本語)

#### 4. 考 察

以上概観してきたように、本書は wh 構文の多様性を扱った内容で、英語のみならず LA や中国語や日本語のデータも多数扱い、そこから興味深い理論的帰結を導き出しているため説得力に富んでいる。特に多重疑問文に関しては、意味解釈の領域まで踏み込んで詳述しており、その結果独自の3分類(5)を提案し

ている点で大変意欲的であるが、この分類法については他の意味論学者からの反論も予想される。例えば Engdahl 1986 は、ペアリスト解釈（分配的解釈）は関数的解釈の特殊ケースに過ぎないと主張しているし、Groenendijk and Stokhof 1984 等は、ペアリスト解釈（分配的解釈）と関数的解釈とは何ら関係はないと論じている。

また関係詞節の分析に関しては、Kayne 1994 の普遍的基底仮説（universal base hypothesis）の提唱以来議論が再燃し、この約 10 年間に多数の論考が発表されてきたものの、その論調は概して、Kayne を支持するかないかの二者択一的な内容であった。ところが本書は、英語の 2 種類の関係詞節の分析をともに容認し、さらに主名詞後行型関係詞節に対しては左方向付加構造を認めるなど、こうした流れに一石を投じたと言える。

## 5. 結 語

本書の全体的結論として「派生に基づく文法原理」と「表示に基づく文法原理」の両方を是認するため、文法原理には重複が存在するという記述 (Grammar seems to contain redundancies.) も見られ、最小限の文法原理を目指すという時代の流れに照らしてみると、何か釈然としない印象を受けるのは否めない。しかしながら、wh 構文という普遍文法研究上極めて重要な統語現象に関する綿密な考察を展開しており、本書は多くの言語理論研究者にとって必読の 1 冊であることは間違い無い。

## 参考文献

- Brame, Michael. 1968. A new analysis of the relative clause: Evidence for an interpretive theory. Ms., MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Carlson, Greg N. 1977. Amount relatives. *Language* 53: 520-542.
- Chomsky, Noam. 1977. On *wh*-movement. In *Formal syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71-132. New York:

Academic Press.

- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Engdahl, Elisabet. 1986. *Constituent questions*. Dordrecht: Kluwer.
- Groenendijk, Jeroen, and Martin Stokhof. 1984. *Studies on the semantics of questions and the pragmatics of answers*. Amsterdam: Academisch Proefschrift.
- Hornstein, Norbert. 1995. *Logical form: From GB to minimalism*. Cambridge, Massachusetts: Blackwell.
- Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Kuno, Susumu, and Jane J. Robinson. 1972. Multiple *wh* questions. *Linguistic Inquiry* 3: 463-487.
- Schachter, Paul. 1973. Focus and relativization. *Language* 49: 19-46.
- Vergnaud, Jean-Roger. 1974. French relative clauses. Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Shin. 1995. Aspects of questions in Japanese and their theoretical implications. Doctoral dissertation, University of Southern California, Los Angeles.